

まっすぐな新しい道：山崎団地の脇を通り抜ける道を橋の上から眺めると、団地やマンションばかりが目に入る。町田では珍しい風景が広がっていた。
(P15 山崎の谷)



まっすぐな国道246号線：橋間を貫く国道246号線を南方を向いて眺めると、巨大な幹線道路だが、一歩離れて歩道橋から見渡すと、その伸びる先が町田を越れ道につながっているんだなあと想像でき、目に見えない世界まで含む特別な風景ではないかと感じた。
(P19 橋間っ原)



築師台住宅地のつきあたり：築師池公園の東に広がる築師台住宅地内のひとコマ。こちらを向いて立つ正面の家が通りの眺めを受け止め、通りの風景にまとまりを感じさせている。
(P12 パッチワークな世界)



大久保の谷戸：北部丘陵に聳る大久保は谷戸地形の原形を今によく伝えている。谷戸の入口に立っているが、谷は写真中央奥で輪つもの枝谷戸に分かれ、さらに奥へ奥へと伸びている。谷戸の中に足を踏み入ると、見えない先を求めて、先へ先へと進みたくなくなってしまう。
(P08 小野路の壺)

その5
やわらかな境



市街地化が進み家々が建て込んでくると、開発地と開発地、開発地と昔からの街並みが衝突に隣り合うようになってきます。そしてその隙間は、別々のまちが背中合わせに接しただけの景観的にとりとめのない場所となりがちです。しかし、くりぬき歩きの中、そのような境界部で、お互いに背を向けたまちを向かい合わせ、やわらかく馴染ませようとしているかのように思える場所に出会いました。



「水道みち」沿いの三角公園：都町を東西に貫く「水道みち」は周りの街区に対して斜めに交っている。そのため生まれてしまう不整形な余りの土地を利用して公園が造られたが、見回すと周囲の街並みが相容合い、住民が日常的に集う場所となっていた。(P19 都町っ房)



麓の丘住宅地：原田川に向面した斜面にて、宅地開発と樹木の緑の連続を共存させた秀逸な開発地は、パッと見ではその存在が分からないほど地形に溶け込み、多摩丘陵の南縁を形づくる大きい景観の一部となっている。(P11 玉手山地)

◆ 開発境のつなぎ

新興住宅地ではその中央に立派な公園を置くのが一般的です。しかし、住宅地の外縁に設けられた公園を介して、隣り合う住宅地が向き合い、一体感すら感じさせるような場所がありました。

◆ 溶け込んだ団地

時を経た団地が、独自の雰囲気を保ちつつ、周辺のまちと馴染んできているものに出会いました。さらに、団地エリア自体が暖味になり、周囲に溶け込んでいるかのようなものもありました。

◆ 道ばたの余裕

意て込んだ街並みでは道、橋、家が詰まってしまう。それが道ばたにちょっとした広がりがあると、道の景観としても余裕が感じられ、歩いていて楽しい場所となっていました。



山崎団地：高度成長期に造られた山崎団地は、緩やかな傾斜地に曲路を多用した配管計画が特徴。大規模ゆえ、団地内に入り込めば独自の世界となるが、時を経て植栽が十分に育った今、住棟の間とその間を埋める緑を介して、周辺地域と緩やかに馴染み始めているように感じた。(P15 山崎の街)



馬場の坂道：現在の芝浦街道が通るまでは、この坂が下の鶴見川と台地の上を結ぶルートだった。道ばたに続く幅広の緑地帯が、他の坂道とは異なる優美さを与えていた。(P14 馬場の坂)



三輪住宅の小公園：鶴見川沿いにある三輪住宅の、エリアの縁に設けられた小公園。一帯の宅地化が進んだ現在、近隣を含めた街の真ん中にあるかのように感じられ、三輪住宅と周辺を隔らかくつなく役割を果たしている。(P10 鶴川団地)

その6 いびつな辻



市街化に伴い新道が増え、交差点も増加しました。しかし、そもそも地形の起伏を鑑みながら集落を結んでいた道と、それらが交差する「辻」は、地形と人の営みの歴史の積み重ねの中で育まれてきたものです。市街地の中であえて不規則に交わっている辻には、開発時に既存の地形を活かしたものの、開発から外れて旧道の名残が残ったものなどがあり、それぞれに独特な雰囲気を持っていました。



金海東の住宅地の入口：町田街道から一步奥まったこの交差点から、正面は丘を上り、左右は谷へ下る道へと分かれています。住宅地の各方向を一掃できるこの「辻」は、これから住宅地の中に入っていく、まちの「入口」とも見える特別な場所を感じた。(P18 金海段丘)

◆ まちの入口

新興住宅地に向かって幹線道路から一步入ったところに、住宅地の各方向に向かう道が地形に沿って一気に分かれる交差点がありました。そこからは住宅地の各方向の様子を見渡すことができ、その住宅地への入口として、景観的に大切なポイントに思えました。

◆ 旧道との交わり

旧道の複雑な交わりが今なお残っている場所、あるいは新道の交差点に旧道が斜めに交わっている場所などでは、角地に昔を感じさせる佇まいが残って独特な雰囲気を醸し出していました。



森野の六叉路：斜めに走る旧道に新道が十字に交差した「辻」には、古民家を活かしたお蕎麦屋さんが店を構え、新旧が向かい合う個性的な街かどとなっていた。(P17 原町田)



金海の五叉路：金海地区の平地に異彩を放つ複雑な交差点があった。古い地図を見ると昔からある五叉路。東西に伸びる街道に周辺集落からの道が集まっていた「辻」は、半なる交差点というより、方々からの道が集まる特別な場所として、その名残が今も感じられる。(P18 金海段丘)

その7 実は布石



開発に抗して残したいと思うものは多々ありますが、単に「古いから」だけでは説得力に欠ける場面にはしばしば直面します。くりぬき歩きでためつすがめつ眺めると、自然物であれ人工物であれ、さまざまな方向に対して、あるいは遠目でも近目でもなど、ひとつで多くの景観的役割を兼ね担っているものに出会いました。それは、多方面に視みを利かす、ちょうど囲碁の「布石」にも似た、大切な景観的素材ではないでしょうか。

尾根線道：細い流れが美筋も集まり龍見川となる上小山田町、その細い流れのひとつが始まる谷戸先陣の風景。尾根線道の緑が背景となり、尾根向こうの市街地の気配を測しつつ、龍見川水源域の奥深い景観を支えている。(PO8 尾根線道)



モデル立ちする寺：正面に見えるのは八王子市南大沢の廣妙寺。谷戸奥の尾根道沿いにお寺もいまや周辺すべてが開発され、削り取された高台に建っている。街区の軸がズレた隣の「四季の丘」住宅地から見えるその本堂は、はずに構えた印象的な高台方だった。(PO5 多摩境通り)



◆ 多弁な緑

街なかの一本立ちの大木、林、並木などが、ためつすがめつ歩く中であちこちから見え、そのたび景観的な意味を感じることがありました。古くから残っているだけでなく、今も多くの役割を果たしていると気づくと、その大切さがより強く感じられます。

◆ モデル立ち

街なかでときどき、ふとその建ち姿に目を惹かれる建物に出会うことができました。街区割りがズレて、たまたまはずに建つことになった建物が、ちょっと気取ってモデル立ちしているかのように見えるのです。偶然の産物ですが、このような建ち位置になった建物が、景観的にもっと活かされたら面白くなりそうです。



相原のケヤキ遺蹟：相原駅の北、八王子に抜けるトンネルの手前から駅を見返すと、一本の大ケヤキが目止まった。左右の谷戸山の間に立ち、標本の高層ビルと重なって見えるその大ケヤキは、谷戸山の緑をつなげたり、背後の高層ビルの人工的な印象を和らげているように感じられた。(PO4 相原今昔)



左の写真の大ケヤキを近くから見る。相原の古い集落は旧道に沿って龍田川を挟んで伸び、大ケヤキは川沿いの敷地際立っていた。かつての相原集落の佇まいに思いを馳せたくなるだけでなく、現在も旧道沿いの家並みを特徴づけている。(PO4 相原今昔)

原風景

私の原風景は、昭和30年に大学入学で上京するまで住んでいた東北の稲作中心の農村の光景です。当時の農作業は、人力であったことや豪雪地のため耕作期間が短いことなどから、集落あげての共同作業で行われていました。生活も自給自足で、家々には野菜畑や収穫物を蓄える土蔵や生食にする柿の木などがありました。私にとっては、この農作業の手伝いなどを通して知った農業での人々の絆や自然との向き合う生活風景が、原風景となっています。

人によっていろいろな原風景を持っていると思いますが、私は、まち歩きで見かける農地盛の無人の野菜売

り場や土蔵、柿の木のある家の佇まいに原風景と重ね合わせ、農業に取り組む人の愛着心を感じ取れます。



小山田の農を感じる街かど。(P07 小山田郷)



荒廃感が感じさせる気配。(P11 玉手山地)

気配

住宅地・郊外の谷戸・尾根筋や繁華街の中を歩いていると、おそらく誰かが手をかけたであろうと思う場所に惹かれるときがあります。

例えば、玉川学園の丘に至る階段を上り、ふと見返すと、その階段の踊り場には、その時には子供達は居ないのですが、彼らが登った路上の落書きが、階段の踊り場から見える向こう側の住宅地の感じ方や周囲の景観に作用していると思いました。

また、繁華街の中の打ち水された路地や、住宅地の中の家々の窓から漏れ出る明かりや匂いなども、その場所を歩く人達にさまざまな思いをめぐらせる役割を果たしていると感じます。このように人の営みを気配として感じるとき、その場所の景観に奥行きと広がりを持たせているのです。

住宅地・郊外の谷戸・尾根筋
や繁華街の中を歩いていると、



景観の引力に惹かれた場所をタネとして整理していくうち、「人が加わってこそ成り立つ景観」なるものも有りえるのでは？という見方が浮かび上がってきました。ここでは、メンバー間で交わされた議論を、いくつかのキーワードの下にまとめてみました。

世代

相模大野駅まで歩いて行ける高層マンション群には若い夫婦が多く住んでいたこと、玉川学園のように駅まで歩いて行ける住宅地では戸建て住宅の建築が盛んで若い夫婦が住むことから、世代が変わると、駅に近い場所が否かによって町田市の人口分布が激変するかもしれません。現在の新築住宅は、比較的小さく、車庫の面積は確保されているが庭がほとんどなく、住宅群では住宅間の仕切りもないほど密集しているのが特徴だったことなどから、世代が変わると、景観も激変する可能性があります。家が小さいということはエネルギーの消費量が少なくなることを示唆しており、今後の地



トピックス1 人と景観

町田駅前、通る人の流れも景観の一部に感じられた。(P17 原町田)

球温暖化の抑制には適していますが、炭酸ガスを吸収してくれる木々の減少が問題となってくるでしょう。



小さな家が密集した街並み。(P16 わさび沢)

共生

緑に包まれた風情のある山崎団地、谷戸の小世界に佇む栗田寺の静けさ、玉学山地の丘陵地の眺望など、町田を歩けば人と景観が共生している安らぎの場所に出会えます。

一方、安らぎの場所が消えてしまった事例もあります。かつて四季の花が咲き、子供が楽しい、木陰で家族が憩う素晴らしい景観であった住宅街の芝生の公園が、今は雑草が茂り子供の遊ぶ姿の無い荒地となっています。

近隣住宅街で少子高齢化が進み、公園で遊ぶ子供が減少、公園の環境維持への人の関心が薄れた事が景観破壊の大きな原因ではないでしょうか？

素晴らしい景観を維持するには、地域の景観に関心を持つこと、人の関与、手助け(ボランティア活動)が不可欠と思います。

眺める人が居ると眺望の良さが引き立つ。(P07 小山田郷)



人そのものこそ



週りに生まれたコンサート会場。(P17 原町田)

町田駅周辺では、駅に急ぐ人、駅から降りてきた人、街をぶらつく人、食事処や酒屋を探す人でごった返すいっときがあり、この人の流れにふと立ち止まると、なぜか浮かれる感覚がある。人が集まる要素はここでは触れないが、とにかく人でにぎわって華やかである。

良い景観に人が集まるのと同様に、人がいるから人が集まる。もし美しい公園とか建物があっても人の息吹を感じることが無ければ物足りなさを抱くに違いない。よい風景に人が集まるように、人の集まりも人を寄せ付けるのである。

緑、空、街並みが重要な景観の役割を担うのと似て、人もその要素の一部であると考えことはできないだろうか。

トピックス2 私なりの景観

景観の感じ方はひとそれぞれで、生きてきた体験の全てから影響を受けているように思われます。ここでは、メンバー各人のなかなか個性的な景観の感じ方を並べてみました。

心の琴線にふれるとき



瀬川の、ゆらく日道。
(P09 真光寺跡)

景観は、美しい、平凡、魅力的などと視覚によって判断されます。これらの視覚の情報は主として大脳皮質で処理されていますので、理性的な判断になり、判断された理由を論理的に説明することができます。

しかし、音楽を聴いている時には、しばしば、心の琴線に触れる感動を味わうことがあります。一瞬、呼吸が

止まり、涙が出てきたりするのは、聴覚は、大脳皮質よりも古い脳で、情動を支配している大脳辺縁系を興奮させることがあるからです。実は、景観を眺めているときも、「ゆらぎ」と表現されている、理性的表現では説明できない、心の琴線に触れる感動を覚えることがあります。景観を眺めていて、この2種類の評価を味わうことができれば最高です。

距離感

私は、目的地へ地図を辿りながら歩くとき、向かう方向に見える目印をとりあえず決め歩き始めるが、そのみちのり(又は行程)は、真っ直ぐな道、曲がった道、上り坂、下り坂などさまざまです。

真っ直ぐな道は、その先に目的とする目印が距離的に近くにありながら、なかなか辿りつけず遠く感じ、曲がった道を歩くと、距離があるにもかかわらず目的地に至る間、道なりに目に入るものを見ながら歩くため比較的近く感じる場合があります。

また、自分が立っているところから見上げる遠くにある景色などは、距離が近く感じられ手を伸ばすとそこに届きそうに感じ、逆に見下げる近くの景色は遠く感じます。

それは現実の距離とは違い、いつも景観として目印になるものが、見え方や向きによって人の感じる距離感に作用しているのではないかと思うのです。



正面の神社が見る位置で遠くや近くに感じた。(P15 山崎の谷)

音と景観



音、光、色の調和が印象的だった日道。(P15 山崎の谷)

景観は視覚で感じますが、音は景観を感じる補助要素ではないでしょうか？

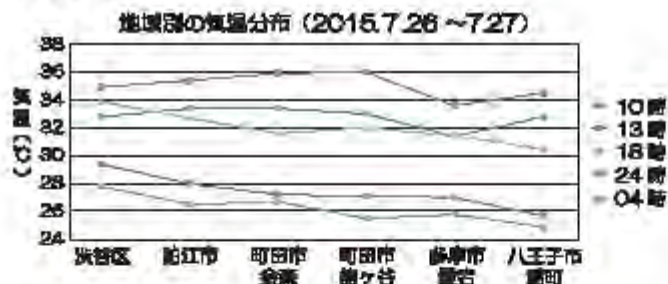
私は山崎の谷を歩いた時、栗田寺の近くの曲がった補道の入口で小鳥のさえずりと蝉しぐれを耳にしました。先が見通せない小道に足を踏み入れる前に樹々の多さと緑の奥深い景色を耳から感じました。細道の両側から聞こえてくる自然に調和した音色がその場の景観をより感動的にしてくれたと記憶しています。

一方、多くの人が集まる町田の繁華街は人そのものが景観の一部ではないかと感じていますが、人によっては騒音と感じるかもしれない人工の音人が人を惹きつける一助になっていると思います。

私は音で景観を感じましたが、音に限らず、景観とはあらゆる感覚で感じるものだと思います。

クールスポット

町田市には樹林におおわれ高低差が50mもの西から東に繋がる丘陵地があり重要な景観資源となっています。この樹木等で覆われた丘陵地の地表面温度は、市街地に比べ蒸発散や緑陰による温度上昇の抑制効果により相対的に低温なクールスポット（低湿地）になります。このクールスポットの冷気は、夜間に道路空間などを通し周辺部に流れ込み熟帯夜などを緩和する効果があります。町田市の高湿となった日の気温を東京都の測定でみると日中は町田市を含め渋谷区から八王子市にわたる広域でほぼ35℃に達しています。翌日の4時頃になると町田市の気温は渋谷区に比べ3~4℃低くなり丘陵地の効果が発現されます。丘陵地の眺望景観とともに熟環境についても考えてみたらどうでしょうか。



冷気を多く貯蓄もしている真っ直ぐな若戸筋。(P07 小山田邸)

よそから見た町田

私は田園都市線の鷺沼駅の近くに住んでいる。比較対象範囲の大小に差はあるが、鷺沼と町田の景観を比較してみた。まず自然としての地形はさほど変わらない。谷戸の纏り成す起伏と線。ただ鷺沼には人工的な植栽はあるが、町田のように点在する自然の緑や多摩丘陵のような豊かな自然は見当たらない。町田には田畑が残っていてタイムスリップしたような原風景と言えるような景観もある。



鹿川の蛇行跡が活かされた公園と住宅。(P18 金澤段丘)

また、鷺沼には有馬川という川があるが、川というより水路。ほぼ垂直のコンクリートの護岸で目分量で幅深さとも5m程度。それに比べ町田には境川、鶴見川、恩田川、真光寺川がある。それぞれに特徴があり、流れに沿って続く並木道は言うまでもないが、川の蛇行で取り残されてできた道と敷地の作り出す景観は魅力的だ。生活上の利便性だけを見ると、高低差があり曲がりくねっていることは「負」として考えがちだが、歩く楽しさを膨らましてくれる要素とも考えられる。

巨大ってどうよ？

景観を壊す、としてまずやり玉にあがるのが構造物で鉄塔、道路架橋などである。それまで見慣れた風景が崩されるのだから当然といえば当然である。パリの有名な塔も最初は不評だったそうだ。

一方で大きなものへの憧れに似て力強さに圧倒されるときがある。通信会社の塔を白と朱と秋空の青のコントラストで美しいと感じたこともあるし、団地内の貯水塔が地域のシンボルになっているという声も聞いた。最初違和感があっても風景に馴染んでそのうち景観そのものになることもある。インフラ設備がいかにも景観と調和しているのか、あるいははしていくのか恨み巡らすのも一興。



三層に立体交差する巨大交差点。(P19 鶴岡っ原)

物語 想い 熱量

佐野 隆二：町田市景観づくりコーディネーター
(考えるグループ担当)

われらがコーディネーターの佐野さんは、役所での会議だけでなく、15回に及び実際の景観まち歩きにも多数参加！ときどき景観の引力に惹かれ消えることもありましたが、それだけ町田が面白く、「くりぬき」歩きを楽しんでいただけているのだらうと、嬉しく思いながら持ったのも懐かしい思い出です。

そんな佐野さんが、共に通じた「くりぬき」歩きの時間の中で何を感じていたか、私たちとしても興味津々なところ、本冊子をまとめるにあたり、トピックスのひとつとして、立場にこだわらない自由な視点からコメントをいただきました。(編集子)

景観の中にある「物語」を味わう

町田市景観計画では、「景観」とは、建物やまち並み、山の積線、道路、木々の緑など、普段目にしている『風景』や『景色』を人々がどのように認識しているかを表す言葉」と説明しています。

私なりに解釈すると、「景観」とは、目の前に広がる景色そのものです。あまり難しく考えなくてもいい。しかし、この瞬間目の前に広がる景観は、その土地が遠い昔から今に至る長い長い時間を経る中で形づくられ、これからも変化していく歴史の一場面であることを忘れてはいけません。

言い換えれば、ひとつひとつの景観には、自然の力、人の技術や営みなど、その土地に関わるあらゆるもの

道の中央で花を咲かせるサクラの物語

右の写真は玉川学園にある一本のサクラです。このサクラは元々その他数本のサクラとともに、広い団地の敷地内にありました。その頃から毎年見事な花を咲かせ、サクラの周りではお花見をする人たちが集まってきました。

しかし、その団地が壊れられることになり、撤去とあわせて狭くて危険だった道路の拡幅も行われることになりました。サクラは道路になる予定の場所に立っていたため、残念ながら伐採されることになりました。

そのことを知った地域の人は、ぜひサクラを残して欲しいと行政に働きかけました。行政と住民は何度も話し合いを重ねた結果、一本のサクラがそのまま残され、道路はそのサクラの本をよけるように作られることになりました。残念ながらその他のサクラは伐採されてしまいましたが、その姿をベンチに変え、想いの場所を演出しています。



の行為によって筋ぎあげられた「物語」があるのです。何気ない景観にも必ず物語が存在します。

例えば、道路の中央に見事に咲くサクラの木があります。普段見慣れている人にとっては、ごく当たり前の景観です。しかし「なぜこんな道の真ん中にサクラの木があるのだらう？」その理由こそが「サクラの木の景観物語」なのです。(写真と説明を参照)

また「ひとつの景観にはひとつの物語」である必要もありません。むしろ、ひとりひとり異なるたくさんの物語があっていい。時には多少の妄想があってもいいかもしれません。多くの人々の心に刻まれるたくさんの物語がある。それこそが、景観が持つ目に見えない大切な価値だと思っております。

人の「想い」や「熱量」と景観

景観は、目の前に広がるありのままの姿を感じるだけでなく、その姿に至った見えない物語に思いをはせることで深みが増していきます。

そして多くの人々が物語の中に、人の「想い」や「熱量」のようなものを感ずることができるようになると、目の前に広がる景観にも運命を感じられるようになり、その景観に関わる人たちにも伝わります。

町田市景観計画の基本理念のサブタイトルに書かれている「人と風景が共に育つ景観づくり」とは、きっとそういうことだと思います。

まとめ

街なかにある「タネ」だからこそ！

「景観のタネ」があった場所

「景観のタネ」があった場所を改めて振り返ってみると、共通する特徴をいくつか挙げることができます。

- ・地形…開発時に使えず余った場所、あるいは元の地形に沿って開発された場所
- ・歴史…開発時に外れて残った場所、あるいは旧道を活かして開発された場所
- ・人の営み…開発前、開発後によらず、人の営みの中で生まれ馴染んできた場所

高度成長期以降、ベッドタウン化の中で町田も宅地化がくまなく進み、今はさまざまな街並みが雑然とひしめき広がっているばかりとっていました。しかし丹念にくりぬき歩いてみると、私たち市民が今まさに住んでいる街なかで、このような地形・歴史・人の営みが重なり合い、積み重ねられてきた場所に出会い、それらが「景観のタネ」として私たちに訴えかけてきていました。

「景観のタネ」は見る人の目しだい

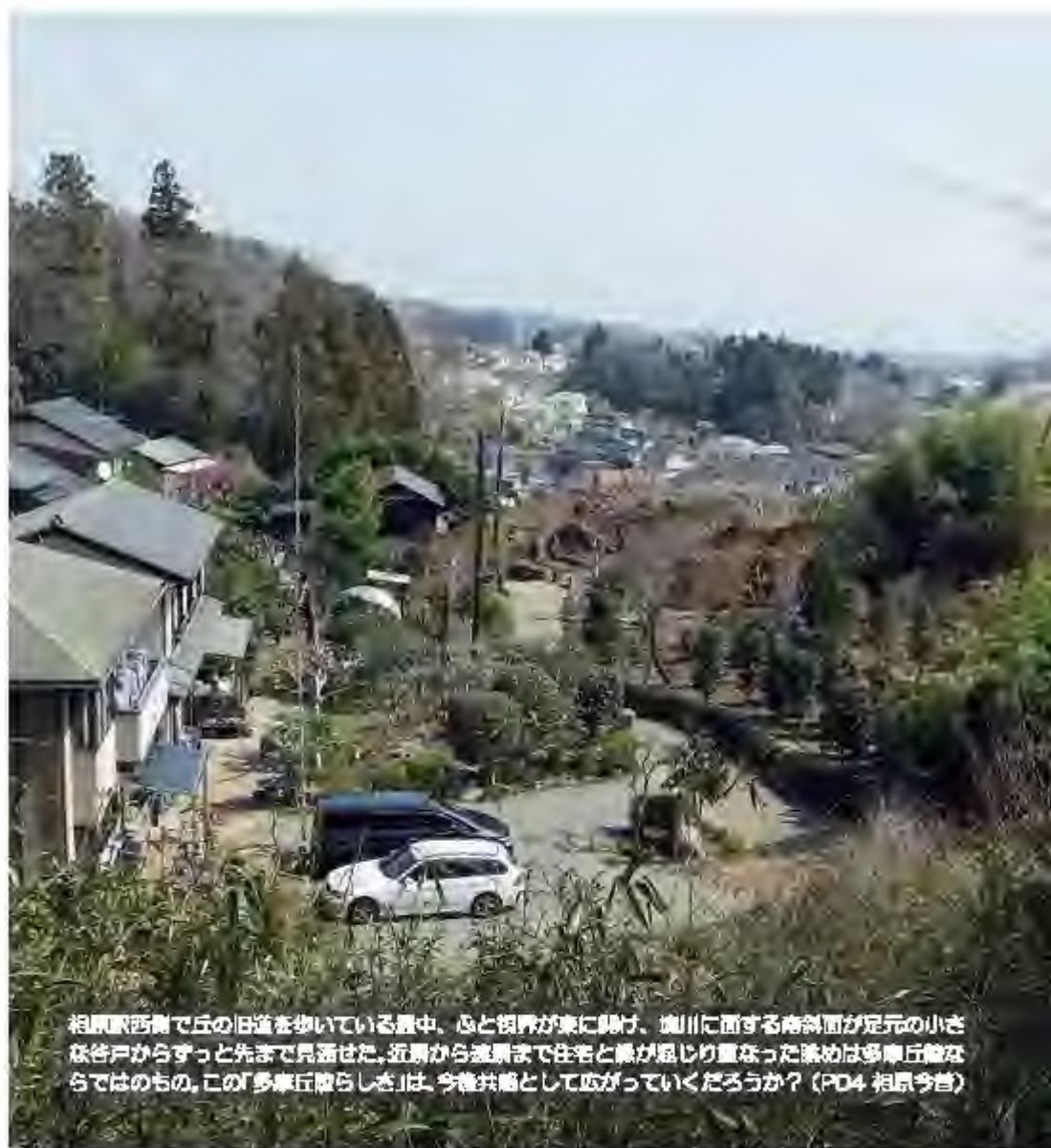
景観の感じ方は人それぞれで、今回取り上げた7つのタネも、たまたま私たち「考える」グループが、町田というフィールドで見い出したものに過ぎません。もし別の市民が集まって町田を見たら、ましてや町田ではない他地域についてとなると、タネのラインナップは全く別なものになっていたかもしれません。その意味で「景観のタネ」は、見る人しだいで変わるものと言えましょう。

「景観のタネ」を見つけ、育てよう！

私たちは休日を楽しもうと、近くへ遠くへ、眺めの良いところや心地よい環境を求めて出かけます。一方、日々暮らす地域の風景については、当たり前すぎて、あるいは事情が分かり過ぎて、かえって景観として客観的に考えにくいかもしれません。

「景観のタネ」は、私たちが日々暮らす街なかで、時かれた時代の新旧を問わず潜んでいて、難しい予備知識がなくても、視点を変えて見直すことで気づける可能性があります。その第一歩として、まずは市民ひとりひとりがタネ的に「いいかも」と思える場所を個人的に見つけ楽しむこと。そしてその先、思いを話し合える仲間の輪が広がり、さらに修景など具体的な動きにつながっていけば、と願っています。

「考える」グループは、「タネ」の見つけ方や育て方について共感の輪を広げるべく、今後も考えながら歩き続けていきたいと考えています。



相模原市西側で丘の旧道歩いている最中、心と視界が奥に開け、奥川に面する南斜面が足元の小さな谷戸からずっと先まで見渡せた。近所から遠景まで住宅と緑が混じり重なった眺めは多摩丘陵ならではのもの。この「多摩丘陵らしさ」は、今後共輪として広がっていくだろうか？（PD4 相原幸彦）

あとがき

原風景としての生活風景

町田ではこれからも、豊かな自然と変化に富む地形が開発を受けて変化しつつ個性を持って融合し、パッチワーク的な景観が造られ続けていくことでしょう。今回拾い出した「景観のタネ」が、今後の豊かな生活風景づくりにつながっていくことを願っています。

まち歩きの際中、記憶に残っている過去の風景を、訪れた地域の風景と重ね合わせていることがあり、自分が体験した原風景が景観を見たり考えたりするときに影響を及ぼしていると実感しました。とすれば今後、町田に生まれ育ち、これからの街づくりを担う人たちが、自分なりの「タネ」を見つけ育てることができれば、今の生活風景も原風景として印象に残るものになっていくことでしょう。

本冊子の作成にあたり、町田市担当課の皆さま、景観づくりコーディネーターの佐野さま、「景観まち歩き」にご参加いただいた皆さまに、ただならぬご協力と応援をいただいたこと、改めて感謝いたします。



真光寺公園の展望台、絶頂を上がった広場に女の子が二人、寂妙な同合いを交し、鶴川団地に目を向けながら二人だけの時を過ごしている。こんな場所も、この子たちにとって原風景になっていくのだろうか？

「町田をくりぬく!!」編集班

- ・栗川碩雄・大下悦司・大沼徹（編集長）
- ・小島睦美・清瀬壮一（班長）・近藤政則
- ・小寺法子・佐野雄二・高野昌訓・園力幹彦
- ・永江和彦・西原要四郎・野口壺一郎

くりぬき歩き実施データ

- ・ルートマップ（現在図、明治図）：各 15 枚
- ・街歩き総回数：15 回
- ・街歩き総距離：およそ 106.5Km 概ね時速 2Km/h
- ・延べ参加人数：208 人
- ・自主ミーティング：20 回 およそ 60 時間
- ・冊子作成作業時間：およそ 700 時間



まち歩きのとある一日、高く遠くを見渡せるところに行くと必ず「ああだ、こうだ」と議論を始めるのが私たちの習わしだった。

◆ この冊子は「町田をくりぬく!!」の本編です。私たちの第 1 期の冊子「町田をわざる!」も是非ご覧ください!

町田をくりぬく!!



製 作：町田市景観づくり市民サポーター 考えるグループ

発 行 年 月：2019年3月

発 行：町田市都市づくり部地区街づくり課

〒194-8520 町田市森野2-2-22

電話 042-724-4267 (直通)

刊行物番号：18-88

印 刷：八昭印刷株式会社

- ・文中の地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の2万分の1正式図及び電子地形図25000を複製したものです。(承認番号 平30情複 第1414号)
- ・無断複製を禁じます。
- ・この冊子は1000部作成し、1部あたりの単価は450円です。

